

Title	大阪と台北の架け橋となり、東アジアの都市フォーラムを築く：俊敏なる英雄(俊雄先生)に脱帽
Author	楊, 運生
Citation	都市と社会. 6 巻, p.31-44.
Issue Date	2022-03
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	特集 1：水内俊雄教授退職記念論文
DOI	10.24544/ocu.20230119-011

Placed on: Osaka City University

(特集1: 水内俊雄教授退職記念論文)

大阪と台北の架け橋となり、東アジアの都市フォーラムを築く

—俊敏なる英雄(俊雄先生)に脱帽—

楊運生(元・台北市萬華社会福祉センター ホームレス支援ケースワーカー、
元・社団法人台湾芒草心慈善協会 事務局長)

前書き

水内先生は、とても元気でエネルギッシュでありつつ、知的な研究者だと常々感じていたので、引退されると聞いて大変ショックを受けた次第である。水内先生は、いつ見てもたくさんの資料や機材を抱えて、飽きることなく走り回っており、まだ一緒に実現していない計画や夢もたくさんあるように感じていたら、水内先生がなんとも「引退」する時期になってしまったとは。

しかし、いわゆる「引退」とは、実際には「いん居を伴わない退職」の略であり、水内先生が教授職から退いたとはいえ、これから仕事を一切やめることを意味するわけではない。水内先生はこれから、新たな身分やキャラクターで、新たな視野を開き、引き続きアジア都市の様々な課題に取り組んでくれるだろうと考える。

水内先生にはくれぐれも定年後のライフプランに心配をなさらず、いつでも呼びかけてさえくれれば、長年の付き合いがあり、水内先生に国境や言葉を越えて結びつけてくれた仲間の私たちはいつでも情熱をもって駆け付ける。論語の「徳不孤 必有隣」(とくはこならず かならずとなりあり)という言葉は、まさに水内先生の素晴らしい人柄や性格を表すためにあるようなものと考えて(図1)。

水内先生は本当に気さくで、言葉は通じなくても、台湾でも日本でも、会うたびにとても楽しく、実りのある時間と経験を多くさせてもらい、長年撮りためた写真を見返すと、一つ一つ素晴らしい思い出が蘇ってきた。

ホームレス研究から最初に着手された水内先生だ



図1 いずれも2012年に萬華においてホームレス支援を行う基督生命教会にて(著者撮影)

が、東アジアのインクルーシブシティネットワーク(EA-ICN: East-Asia Inclusive Cities Network)という国際会議体の設立にもご尽力され、アジアの多くの都市の第一線で活躍する学者や実務家を結びつけ、交流の場を設けることに成功し、本当に大変すばらしい功績だと感じている(図2、図3)。

水内先生は、日本から一步一步、多くの国や都市、地域を旅しながら、ホームレスの現状について地道



図2 台北市大同区においてホームレス支援を行っている
基督教恩友協会の前にて（著者撮影）



図3 台湾「ビッグイシュー」のスタッフと台北市に
おいての打ち合わせ風景（著者撮影）

に研究を進め、社会的不利なコミュニティや地域の持続や再生のために研究され、更に都市開発に関わる課題にも研究のすそ野を広げ、やがて EA-ICN のような国際的な組織を構築するに至り、このような地域で地道に貢献しつつ、国際的な宏大なビジョンを持った水内先生には本当に大変感銘を受けており、非常に誇りに思っている。

水内先生や中山徹先生、全泓奎先生、ジェイさん、山田理絵子さんらから構成される研究チーム（以下、研究チーム）は、長年にわたる台湾でのホームレスや様々な地域でのフィールドワーク・研究を経て、台湾の新住民や都市原住民、栄民（退役軍人）等の多様な社会的弱者への調査・訪問にも携わってきた。私の記憶と経験では、このような広範囲の社会課題について、これほど広範のかつ深く研究するような学術研究機関はほとんどないし、なおかつ言葉や文化、習慣が異なる都市で、というのには更に驚きである。

水内先生の豊富な経験と知識、卓越したビジョン

と視野、そしてなにより、親しみやすくフレンドリーで謙虚な人柄こそが、EA-ICN の規模拡大や、国際的な地位向上につながってきた理由ではないかと考えている。

水内先生と知り合ったきっかけ

私の記憶が正しければ、それは2001年のことだったはずである。日本の大阪市立大学の先生が研究チームを率いて、ホームレス問題の調査のために台北に来たいので、その紹介と報告を手伝ってくれないか」という電話が突然かかってきたのを今でもはっきりと覚えている。最初はちょっと驚いたし、詐欺グループからの電話かと思っていた。というのも、当時の台湾では、ホームレスに関する議論は非常にマイナーな社会課題であり、いわゆる「ホームレス問題」は非常にネガティブな印象があり、台湾の学術研究機関ですらほとんどこのような課題に無関心だったため、研究をしたいと思う海外の研究機関があるわけがない、と思ったからである。

しかし、よくよく話を聞いてみると、詐欺ではなく、本当に日本人の先生が台北に来るのだと確認できたので、それはもちろん大歓迎だよ！と思った。私自身は長いこと、台北でホームレスのアウトリーチ活動に携わってきたものの、ずっと手探りの状態であった。当時、台湾ではホームレス支援はまだ黎明期ともいべき段階であり、ホームレス支援の団体等も少なく、やはりその時点では、ホームレスについては議論よりも批判、寛容よりも追放、という社会的な雰囲気であった。

一方、日本は何と言っても、ホームレスという社会課題について、すでに長い歴史の中で豊富な経験が蓄積されており、彼らからホームレス支援のための経験や方法を学ぶことで、自分たちのできる支援の内容や技術を確固たるものにすることができると考え、調査への協力を快諾した。

水内先生をはじめ研究チームの皆さんと初めて会ったのは、台北市のホームレス収容所（シェルター）であった。彼らは飛行機から降り、そのままタクシーで台北市のホームレス収容所に直行したが、面白いことに台北市の施設なのになぜか台北県（現在の新北市）にあるので、この点を説明するだけで



図4 台北市就労支援センター・萬華就労サービスカウンターにて (著者撮影)



図5 新北市においてホームレスへのアウトリーチ支援を行っている新北市ボランティアサービスクラスにて (著者撮影)

も若干時間がかかったのである。

何しろ初対面なものだから、まずはお互いいつもの慣れた概念や考え言葉からいったん離れ、スムーズに互いにコミュニケーションが取れるようなやり方やロジックを模索するのに時間がかかっていた。例えば、私が言う遊民、流浪漢、羅漢脚、街友等の言葉は、彼らが知っているラフスリーパーという言葉は、「ホームレス」という言葉とはほぼ同じ意味合いを共通して持っているが、お互いには比較的馴染みのない言葉であった。また、台湾でのホームレスの日常生活に関連した言葉として、陣頭に出る、プラカード持ち、名義貸しや、台湾の社会福祉政策の固有名詞である低収入戸、ハイリスク世帯、更には戸籍地、居住地など、日本には似たような概念はあるかもしれないが、水内先生たちにはあまり馴染みのない言葉だと思う。一方で、厚生労働省、自立支援、住民票、生活保護、生活扶助など、日本

の社会福祉や政策に関連する用語も、私としても初めて聞く言葉ばかりであった。このように、お互い初めて聞く言葉やお互いが当たり前のように使っている概念や考え方について、互いに言葉や用語をしっかりと確認しながら理解した上で、話を進めないといけないため、多くの時間を費やした(図4、図5)。

水内先生らの研究チームも、どこかの研究機関のように、ただ遊びに来て、会議やイベントをして、記録用の写真を何枚か撮って帰って、いわゆる研究報告書を発表して、その後はお互い音信不通のままで関係性が終わっていくものだと最初は思っていた。

しかし驚くことに、水内先生らの研究チームは、その後も何度も台北に足を運び、ホームレスの課題についての議論や調査は、ますます熱を帯び、研究チームの熱意をすごく感じられ、お互いの交流もますます密接なものになっていき、ホームレスから地域、個別ケースへの支援から政策的な展開に徐々に議論が広がっていった。私たちが初めて出会った2001年頃から、この研究チームは最初のホームレスの課題に関する研究から、現在の国際組織であるEA-ICNへと拡大してきた。水内先生たちの研究チームは、日本からアジアへと視野を広げ、社会的不利に直面する人々や地域のために、常に情熱的で献身的な努力を示してきた。

見知らぬ人から身近な人へ

このような密接な交流(年に2、3回の時もしばしばあった)を経て、彼らが自分の仕事や研究に対しての真剣かつ丁寧な姿勢を非常に強く感じ、水内先生をはじめ研究チームのメンバーたちは、いつも沢山の資料や電子機器を持ち歩きながら、私についてあちこち駆け回り、さすがに気の毒に思い、荷物を運ぶのを手伝おうとすることもあったが、いつも遠慮気味に断られた(私は髪の毛が少ないだけで、本当はまだまだ若くて重い荷物も全然運べるから)。

研究チームの皆さんにとって、台北での研究では、常に自分たちとは全く異なる言語や文字によって構築された社会システムやロジックに直面するにもかかわらず、常にそれを素早く理解して対応する

ことができた。これは事前の準備なくしてそう簡単にはできないものだろうと思ひ、ますます彼らの前向きな研究精神に心底から感服した(図6、図7)。

水内先生たちの研究チームには、驚かされることが多くあった。台湾の様々な社会課題について、大変な時間と労力をかけて研究して急いで研究レポートを仕上げるために、気軽に台北に来て打ち合わせをしているのではなく、本当に研究プロジェクトとして真剣に取り組んでいることが、長い間付き合ってきてよくわかったのである。

例えば、私から予定している日程と併せて訪問先の組織名を参考に送っただけの場合でも、彼らは必ず事前にインターネットで検索して、その組織の運営や背景を調べて理解しておくことが多いため、彼らを始めて連れて行く場所でも、ヒアリングや打ち合わせの際に彼らからの質問を聞くと、彼らはすでに事前にその組織についてある程度の知識や理解を持っていることがよくわかるし、それによって議論の

要点をいつもすぐに把握することができた。台湾の大学の教授を訪問して、研究室でお会いして気軽にお話しするぐらいの打合せでも、その教授が書いた論文等を事前に読んで準備してから、台湾に来て議論するのである。

また、台北市だけでなく、国から地方自治体に至るまで、水内先生たちは台湾の社会福祉関連の法令等を幅広く収集・整理し、単にインターネットで収集・ダウンロードしただけでなく、丁寧に調査・整理していたので、私が何気なく法の条文を口にすると、すぐにデータから探し出して見せ、私が言ったことと同じかどうかを確認してくれることがよくあった。これには本当にショックを受けたものである。私は長年、台北で仕事をしているのだが、これらの法律をほとんど読んでいなかったし、ましてや真剣に読んで整理するなんてしたこともないので、本当に汗顔の至りであった。

また、水内先生たち研究チームの姿勢に感銘を受けたからこそ、彼らが本当に真剣に研究していることをよく理解しているし、彼らが台湾の国の機関や地方自治体の組織について知りたいと思ったらそれがホームレスの政策や資源に関する調査であれ、その他の社会課題(地域の社会福祉センター、地域リーダーである里長が取り組む多様な地域サービス、平価住宅への訪問、栄民や新住民に関連する組織との打ち合せなど)であれ、私は常に彼らの希望をなるべく沿った形でスケジュールを組み、関係者と調整して、研究チームの皆さんとスムーズに面会してすぐにも議論やコミュニケーションができるように手配してきた。

更に、彼らのはるばる海を渡り、台湾を訪れた際には、権力ある中央当局の巨大組織を探すのではなく、いつも様々なケースに直接対応している現場レベルの組織・機関を訪問することから始めた。そうすることにより、これらの組織や機関が第一線で行っている支援やサービスの実態や、実際の方法や経験について直接得ることができるからである。

このような交流、コミュニケーションの過程において、彼らが日本での豊富な研究調査を通じて得られた社会福祉や地域に関する最新かつ的確な方法や経験を、現地にいる私たち台湾側の人たちにも学



図6 台北市萬華区の台北仁済院にて(著者撮影)



図7 台北市萬華区にある台北仁済院の歴史展示室にて(著者撮影)

ぶことができ、本当にお互い非常に得るものが多かったと考える(図8、図9)。



図8 台北市萬華区にある国民住宅の最上階にて
(著者撮影)



図9 台北市労働局萬華区就労支援サービスカウンターにて
(著者撮影)

水内先生たちの研究チームが台湾に来る機会が増えるにつれ、研究チームは台北市でのホームレスに関する研究から、台北県(現・新北市)、桃園県(現・桃園市)へと徐々に拡大していった。また、水内先生たち研究チームのメンバーたちと一緒に過ごす時間が多くなるのにつれ、私自身も日本のホームレスの現状や支援の現状についても多くのことを学ぶことができた。実際、その後も複数回、日本のホームレス支援機関に訪問させてもらい、地域や公園におけるホームレスのライフスタイルを観察させてもらう機会があり、こうして私は釜ヶ崎という場所を好きになったのである。

2003年に、水内先生と研究チームの計らいで、生まれて初めて日本に行かせてもらった。日本に到着以降、最も印象に残り、そして日本で一番好きな

建築物は、釜ヶ崎に位置するあいりんセンターであり、この多目的の建築物がこのまちの中心に聳え立っていることが、とても羨ましく思った。数日間、このあたりを色々と訪ね歩いていくうちに、更に釜ヶ崎を歩く際の雰囲気が好きになったのである(図10)。

釜ヶ崎の街角に立っていると、自分が本当に萬華を離れて日本に来ているのかがいつも分からなくなるものである。古びた建物の雰囲気、安宿が低廉な賃貸アパート、年配の地域住民のペース、ホームレスのライフスタイルや、そのための支援サービス、更にいたるところに展開される蚤の市、路地に隠れた小さなお店、三輪車に乗って空き缶などをリサイクルしている人たちなどなど、ここの雰囲気は本当に萬華と共通する部分が多すぎる(図11)。

面白いことに、その後、周りに釜ヶ崎を訪れた台湾の人たちも、「マンガ(萬華の旧名)のようだ」と無意識に言ってしまうことが多かったのである。一



図10 いずれも大阪市西成区釜ヶ崎のあいりんセンターにて(著者撮影)

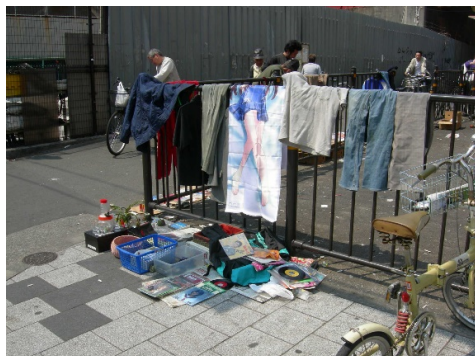


図11 いずれも大阪市西成区釜ヶ崎にて（著者撮影）



図12 いずれも大阪城公園にあったテント小屋にて（著者撮影）

方、水内先生をはじめ研究チームのメンバーなど、多くの日本の研究者が萬華に来たときも、竜山寺周辺の古い集落を訪れたときの日本語の会話の中に、「釜ヶ崎」「釜ヶ崎」という言葉をよく耳にした。こうして水内先生をはじめ日本の研究者たちを通じて、萬華と釜ヶ崎の関係者が長年にわたって交流してこられたことが、とても嬉しく思っている。

水内先生を中心に日本現地の研究者らの案内で、大阪の公園に直接訪問させてもらい、テレビでもよく報道される日本のホームレスが最も利用する居

住空間であるテント小屋をついに目の当たりにすることができた。私にとっては夢にも出てくるようなテント小屋に実際に立ち入ることができただけで、本当にわくわくする気持ちが長く続いていた（図12）。

水内先生をはじめ研究チームの皆さんは、とても熱心に、ホームレスが暮らす公園や河川沿い、地域の低廉なアパートなどを案内してくれて、もちろん、複数の異なる規模や属性のホームレス支援団体や組織にも連れて行ってくれた（図13、14）。短い期



図13 いずれも大阪市西成区釜ヶ崎にて（著者撮影）



図14 いずれも大阪の鉄道高架下のテント小屋にて（著者撮影）

間だったが、色々と案内してくれたことで、本当に大変勉強になり、とても視野が広がり、台北でも、単に食べ物や短期的なシェルターを提供するに留まらず（もちろん、これらも非常に必要であり重要なことではあるが）、もっと多様かつ体系的な支援やアプローチの必要性を強く感じた。

日本におけるホームレスの問題は、非常に早い段階から、雇用構造の変化、高齢者層の就労問題、居住の課題、社会福祉、医療など様々なアプローチから、人々がホームレスになる理由を多角的な視点から詳細に分析してきたため、様々な支援や資源提供のモデルやアプローチも早くから開発されてきた。現地での一連の訪問・見学を経て、日本政府がホームレス支援の分野にこれほど多くの資源と資金を投入してくれたことを、とても羨ましく思った。

2009年、雲門舞集（クラウド・ゲイト舞踊団）という台湾のコンテンポラリー・ダンス・カンパニーによる「雲門舞集流浪者プロジェクト」の助成金を

得て、2ヶ月間日本に滞在することができた。その間も水内先生を中心とした研究チームのメンバーたちに熱心に案内してもらい、大阪、東京、横浜、川崎を訪れ、ホームレス支援を行う多くの団体や組織に訪問することができ、大変勉強になったことはもちろん、水内先生はじめ研究チームの皆さんは、日本中のホームレス支援・研究分野において築いてきた幅広いネットワークに、とても感銘を受けたものである（図15、16）。

水内先生は、日本やアジアの都市におけるホームレスや地域における住宅・居住の課題について、非常に詳細でしっかりとした調査経験に基づいて、長く研究に取り組んできたので、台湾で開催される多くのホームレスに関するシンポジウムや会議に度々招かれ、日本におけるホームレスの現状や、支援団体によるサービス、国や自治体によるホームレス支援のための法律や福祉施策の策定などについて経験を共有してくれた（図17）。これらの経験は



図15 いずれも大阪市西成区釜ヶ崎にて（著者撮影）



図16 川崎市のホームレス支援団体（著者撮影）

台湾におけるホームレス支援団体や組織のための参考のみならず、実際に日本での経験を踏まえて、ホームレス支援の実態や課題について関連者と議論を展開してきたため、台湾の関連法制度や福祉施策においても重要な参考とされている。

URP 台北サブセンターと台湾芳草心慈善協会の設立

URP 台北サブセンター設立の一番の立役者は、もちろん、水内先生である。水内先生をはじめ、研究チームの皆さんが2001年から頻りに台北を訪れ、台北に関する都市問題について一定の理解と蓄積を得られたこともあり、水内先生から、是非 URP の台北サブセンターを2010年に設立できないと提案されたのがきっかけだった。

水内先生を中心に、研究チームの皆さんと一緒に仕事ができ、実務と学問の両面でより緊密な交流と研鑽する機会を持てることはとても嬉しいことだったため、水内先生からのご提案や台北サブセンタ

ーでの役割について快く受け入れた。このような経緯で、URP の台北サブセンターは、2010年台湾における地域の居住や幅広い都市発展に関する課題について、国際的な交流と経験共有の場として、設立することになった。

その後、台北のホームレスに関する課題を更に詳しく理解し、問題意識を深めることにより、アジア



図17 いずれも桃園市にある銘伝大学の国際会議にて（著者撮影）



図18 いずれも台北市中正区のレストランにて (著者撮影)



図19 いずれも台北市萬華区にて (著者撮影)

の各都市におけるホームレスの現状や経験を共有し、より密な連携への展開につなげていきたいとの思いから、水内先生から「今後多くのアジアの都市におけるホームレスに関する課題をともに議論し、お互いの経験を共有する際の窓口として、是非協会でも立ち上げたらどうか」と、更にアドバイスされた。

これを受けて、2011年に私は「人民団体台湾芒草心慈善協会」を設立し、2012年には裁判所で法人としての公証申請を経て、その後正式に「社団法人台湾芒草心慈善協会」として発足した(図19)。

「社団法人台湾芒草心慈善協会」の設立以降は、団体として台北においてホームレスに直接支援を提供し、そのための意識啓発、政策提言に向けた活動を開始しており、協会スタッフの尽力と創意工夫のもとで、協会は今や台湾におけるホームレス支援や意識啓発のみならず、幅広い社会的弱者の居住問題への提案についても積極的に取り組んでいる。今日における台湾芒草心慈善協会の発展は、当初水内

先生のご提案なしにはなしえなかったことである。

水内先生を中心に研究チームの皆さんは、台北に来てホームレスの生活実態について調査し、関連する支援団体や組織を訪問するだけでなく、台北の古い地域、特に萬華区の地理や歴史的背景にも強い関心をずっと持っていた。あるとき、皆さんを連れて「理教公所」という萬華の名刹の近くにある違法建築集落に調査に行ったとき、あそこに到着した途端、彼らの体からは興奮と感動が伝わってきて、本当に宝物でも見つけたような興奮ぶりで、あちらこちらをひたすら写真を撮って記録していた。当時は、彼らの行動についてあまり気には留めなかったが、あそこの違法建築集落が後に取り壊されて公園になったことを受けて、私の手元には取り壊し前の写真が1枚も残っていないことに気がつき、地元の間人として、このような貴重な場所のための記録となる映像を全く持っていないことに初めて気づかされた。

それ以降、私自身も古い地域の歴史や発展の過程

をきちんと記録することの必要性を強く感じるようになったのである。都市更新や、再開発のペースがどんどん加速するのにつれ、多くの古い建物、地域、古くからの住民もそのうちすぐ消えていく。水内先生たちの研究チームと共に、ホームレスの課題に関する研究に加えて、古い地域の発展プロセスや、古い地域に表れつつある新たなライフスタイル、更に将来の地域における居住課題など様々な議論について、私自身も幅広く関心を持つようになってきた(図20、図21、図22、図23)。

水内先生は職業柄、地理や都市開発に強い関心があり、台北における地域の歴史や発展、地理的環境の変遷や文化的発展の変化などについて、よく質問されたが、水内先生の質問になかなかうまく答えら

れなかった。なにしろ、私自身このような分野に関しては全くの門外漢であり、当初も自分が今取り組んでいる仕事との関連性があるようにも思えないでいる自分がいたからである(のちに、実は非常に密接な関連性があることがよくわかったが)。ただ、水内先生の質問にきちんと答えられるように、自分なりにきちんと勉強して知識をつけてきたこと、更にそれがのちの自分の成長にとっても役立ったとつくづく思っている。

水内先生たちの研究チームは、台北での調査・訪問や打ち合わせを終えて帰るだけでなく、帰国後も、ホームレスの分野だけでなく、台北の地域歴史や地理的な変遷などについても、更に多くの調査と研鑽を積み重ねてきた。

例えば、彼らが集めた台北の古地図や関連するウェブサイトの情報などを持参し、地域への訪問や現地調査の際に、その場で地図を囲んで、過去と現在のまちなみを比較しながら、せわしなく議論を始め



図20 台北市萬華区にある台北仁済院のエンタランスにて
(著者撮影)



図21 台北市萬華区にある台北仁済院の中庭にて
(著者撮影)



図22 台北市中正区の宝蔵巖にて(著者撮影)



図23 台北市萬華区騰雲里の国民住宅団地の最上階にて、
里長による地域紹介の風景(著者撮影)

ることがよくあった。これらは、事前の十分な準備と理解なくしてはできないことであり、私も彼らから徐々に影響を受け、地域の発展や変遷が非常に重要な課題であるように思えてくるようになり、今となっては、地域の歴史的な発展こそが都市づくりの重要な核の一つであることが、改めて確認されている時期が来ているようである。

それ以降、私は台湾に関する文化、歴史、歴史的建造物や地理の変遷等に関する書籍を入手して自己研鑽を重ねつつ、経験豊富な先生にも教えてもらいたく、休日を利用して萬華社区大学（コミュニティ大学）の文化資源コースにも受講し、歴史地理学の専門家である高伝棋先生とも知り合うこととなり、その後も実際に高先生に、何度も水内先生たちの研究チームに地域の地理や歴史を案内してもらった。言葉が通じなくとも、お互い地理や地域づくりに関する豊富な知識を持つ彼らは、時には通訳を介さずとも、簡単な単語やボディランゲージのみで

お互いの考えを理解し意思疎通することができたことから、水内先生たちが現地調査にあたっての事前準備がいかにかかりしたものかがよくわかる（図24、図25）。

これらの経験から、私も水内先生たちを連れあちこちら現地調査に行き、そのついでに自分自身も地域の歴史に関する歴史を身につけるのが楽しみになり、例えば、以前は主に退役軍人やその扶養家族のための「眷村」だったが、住民が手頃な家賃で住めるように建て替えられた国民住宅や、台北市政府が認定した低所得者層「低収入戸」のみが入居できる平価住宅など異なる様々な住宅への見学や、社会福祉団体や学術機関への訪問機会も多く、これらに関わる連絡や調整も非常に勉強になるので、今まで本当にいつも喜んで対応していた。

また、時々、地域リーダーである里長さんに地域内の現状を紹介してもらうこともあった。結局のところ、ホームレスや社会的弱者に関する研究の中で、



図24 いずれも台北市萬華区にて、高先生によるご案内風景（著者撮影）



図25 台北市萬華区にて、周辺地域の国民住宅を紹介する騰雲里の李里長と高先生（著者撮影）



図26 いずれも台北市中正区忠勤里にて
(著者撮影)

人々が暮らす地域の中に、包摂的で快適な環境をいかに実現し、負担可能な居住空間をどう提供していけばよいのかに関する議論は、最終的には地域の現状そのものに着目しなければならない。そのため、地域リーダーである里長さんに地域住民の実態やライフスタイル、更に住民へのサービスや様々な資源について紹介してもらうのが最も直接的かつリアルな内容であり、それこそが水内先生たち研究チームが追い求めてきた情報そのものである。

里長といえば、台湾で最も著名で最強とまで言われる里長は、南機場地区の発展の歴史の中で大きな役割を果たしてきた忠勤里の方荷生里長である。今日、この地域に多数ある古い国民住宅や一般住宅には、単身高齢者、低所得世帯、高齢の栄民、様々な課題を抱えた社会的弱者の賃借人・入居者が住んでおり、このような複雑な住民構成と社会環境に直面し、方里長は絶えずに情熱を傾け、創意工夫を凝らして地域づくりに取り組んできた結果、非常に生き生きとして、人情味のある暖かい地域に生まれ変わ

りつつある(図26、図27)。

方里長の案内のもと、水内先生たちは度々、南機場地区という古い地域での多様な社会的弱者である住民のための、方里長が発案した様々な独創的な地域づくりの取り組みについて調査してきたし、そのたびに方里長の精力的な姿勢に感服したのである。数回の頻繁な訪問と交流を重ね、水内先生たちの研究チームはやがて方里長との親交を深め、その後は更に方里長率いる台湾からの訪問団による日本の高齢者への地域づくりやデイサービスなどの取り組みに関する見学ツアーについてもコーディネートし、お互いのより一層の実務的な交流を実現してきた。

水内先生を中心に研究チームの皆さんと、方里長や南機場地区関係者とは以上のように、お互い十分な交流の蓄積と理解があるので、これまでの EA-ICN の会議も、実際に南機場地区のコミュニティセ

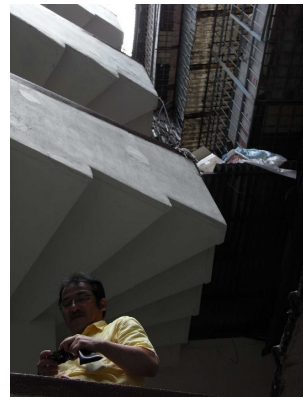


図27 いずれも台北市中正区忠勤里の南機場国民住宅にて
(著者撮影)



図28 いずれも台北市中正区忠勤里・南機場地区の
コミュニティセンターにて (著者撮影)

ンターで開催したこともあった (図28)。

水内先生たち研究チームは、台北におけるホームレスの生活実態や、そのための支援プロセスを理解するために、ホームレス支援団体、組織やアウトリーチ担当のケースワーカーへのヒアリングだけでなく、ホームレスの当事者たちにも直接、お話を聞いてみたいとの希望があったため、萬華区で長年ケースワーカーとして第一線でホームレス支援の現場で活躍してきた張献忠氏にお願いして、公的扶助を受けて低収入戸の認定を受け、家賃手当なども活用し廉価な賃貸アパートに居宅移行した元ホームレスや、現役で路上生活している方にお話を聞く場を設けてもらった (図29、図30)。

何度か当事者へのヒアリングを重ねてきたものの、彼らはただ単に分析データを集めているだけだと思い、あまり気にせずにはいたが、ある日、研究チームのメンバーたちが分厚い資料集を取り出し、「ホームレスの方々へのヒアリングも文字起こしを作成したよ」と誇らしげに語り始めたので、非常

に衝撃を受けた。というのも、私なんか台北で長年ホームレス支援に従事してきたけど、ホームレスの方々へのヒアリングの文字起こしなんか一度も作ったことないのに、日本から来た彼らがまさか率先して台湾のホームレスの方々の話をそこまで丁寧に記録してくれるとは、本当に驚きだった。それ以降、私もホームレスの方々へのヒアリングから文字起こしをするようになり、きちんと記録をすることによって、彼らの今までの人生やライフストーリーにより近づけることと、彼らが路上生活で遭遇する様々な事柄をより正確に理解することもできるし、それがケースワーカーにとって本当に役に立つことに気づいた。

水内先生を中心に研究チームの皆さんは、ホームレスの当事者だけでなく、これらの社会的弱者やホームレスの方々 (高齢、心身障害などの常用により、



図29 賃貸アパートに居宅移行した元ホームレスの方への
ヒアリング (著者撮影)



図30 高齢者、障がい者、ホームレスなどの社会的弱者の
入居を積極的に受け入れる家主さんへのヒアリング
(著者撮影)

自分の身の回りの世話ができないかのために、賃貸住宅を借りるのが難しい方々に、善意で家を貸してくれる家主にもヒアリングを行ってきた(図31)。私もこのような社会的弱者を受け入れてくれる大家さんを何人か知っているが、今までヒアリングしようなんて思ったこともないし、ヒアリングを受けることや、家を貸していることが公になることを避けたという大家さんが実際に多くいるのが実情である。この状況の中で、ふたたびホームレス支援の現場を熟知したベテランケースワーカーの張献忠氏に依頼して、これまでの地道な活動の中で築いた人脈を生かしてもらい、すぐにヒアリングに応じてくれる大家さんが何人か見つかった。このように、水内先生たちとご一緒し、彼らのアプローチや方法を見ているうちに、私自身のホームレスの方々との接し方や、そのための支援の在り方について新たな示唆を多くもらい、非常に視野が広がったと実感している。



図31 高齢者、障がい者、ホームレスなどの社会的弱者の入居を積極的に受け入れる家主さんへのヒアリング
(著者撮影)

例えば、「台北平安報」というホームレスの方々の情報誌を2003年10月から発行し始めましたが、この出版物を作ろうと思ったのは、日本に行ったときに、ホームレスの方々が集まる公園や場所で、ケースワーカーや支援団体のスタッフが「路情」という情報誌を配布しているのを見て、着想を得たからである。「路情」の中には、ホームレスが路上生活をする際に気をつけなければならないことや、関連する福祉機関への連絡先やこれらの機関からの案内などが書かれている。この路情からヒントを得て、自分でも制作・配布したいと思い、「台北平和報」と名付け、月に1回発行するようにし、その中でもホームレスの路上生活の際の注意すべき事項や、支援を求められるネットワーク、福祉施策や就労に関する情報も掲載し、その後は更にホームレスの方々に、イラストを寄稿してもらっていた。

水内先生には豊富な知識に、世界中の多くの都市での実践的な研究経験をお持ちで、ホームレス支援のみならず、地域づくりに関わる民間団体ないしは行政機関に、客観的かつ有用なアドバイスをたくさん寄せてこられた。水内先生が引退されることをいきなり聞かされ、大変寂しい思いでいっぱいなのだが、今後はより時間に余裕ができるため、是非台北で長期滞在されることを期待する。今までは、色々な仕事に追われ、台北に来るたびにいつも弾丸旅行で滞在時間が大変短く、そのせいでちゃんとおもてなしもできてこなかったのだが、今後時間に余裕ができれば、もっともっと台北にのんびり滞在して、私たちのおもてなしを是非ともゆっくりと受けてもらいたいものだ。